SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

# 御前崎の観光人類学：
# 浜岡・御前崎地区の比較を通して



| | |
|---|---|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2013-01-25<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 志田, 芙似子, 畝重, 将矢, 佐伯, 英朗, 森下, 奨士<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/10297/7047 |

# 御前崎の観光人類学

## ～浜岡・御前崎地区の比較を通して～

志田　芙似子、畝重　将矢、佐伯　英朗、森下　奨士

はじめに
1 浜岡地区の観光の歴史
2 御前崎地区の観光の歴史
3 御前崎市の観光をめぐる課題
3.1 浜岡地区の観光をめぐる課題
3.2 御前崎地区の観光をめぐる課題
3.3 原発の影響
4 課題への取り組み
4.1 浜岡地区での取り組み
4.2 御前崎地区での取り組み
5 提言
おわりに
参考文献・参考資料・参考 HP

### はじめに

観光は 21 世紀最大の産業と呼ばれ、いまや巨大な社会現象となっている。この活動は 19 世紀前半西欧の交通技術の刷新と社会変化、とりわけ鉄道旅行の発達とともに誕生し展開されていった。それが生活のなかで大きな位置を占めるようになったのは、特に 20 世紀後半、欧米でのライフスタイルの変化による。労働時間が減少し、有給休暇が長期化するなかで、余暇や遊びのなかに自己実現や生きがいを見出す人びとが出現するようになったのである。そこで観光という余暇利用の形態が大衆化し、日本では昭和 50 年代後半からこのような傾向がみられた。今日では先進国、途上国を問わず多くの国や自治体が開発の一環として観光に力を注いでいる。このため、観光関連産業が 21 世紀の基幹産業として位置づけられる場合もある(山下　2007)。

このように発展してきた観光に関して、人類学の分野での研究が盛んになるのは、V･スミス編集の『Hosts and Guests：the Anthropology of tourism』が昭和 52(1977)年に出版されてからである。この論集では、観光現象をはじめてホスト(観光客を受け入れる社会)とゲスト(観光客)とのかかわりにおいて捉えようとした。日本では昭和 50 年代から観光研究の成果が少しずつ発表されるようになる。日本で最初の観光の人類学的研究プロジェクトがスタートするのもこの頃である。平成 3(1991)年にはこのプロジェクトの成果が、「観光人類学」という名前のシンポジウムで発表された。平成元年代後半から、日本人研究者の観光に関する出版物も増加し、現在では観光の人類学は応用人類学の一つとして数えられている。学会でも観光に触れる発表が

複数なされ、大学の授業で扱われるなど、その内容を充実させてきている(橋本1999)。

多くの国や自治体が観光に力を入れている、と述べたが、御前崎市もその例外ではない。市のHPを見ても明らかなように、観光は御前崎市を支える産業の1つに挙げられる。それでは、御前崎市で観光について調査する意義はどこにあるだろうか。平成23(2011)年3月11日の東日本大震災以降、御前崎市と言われて多くの人が連想するのは浜岡原子力発電所(以下浜岡原発)のことと推測される。しかし今回のフィールドワークは原発についての調査ではなく、原発のある地域を調査することが目的である。浜岡原発ばかりがメディアに取り上げられている現在、御前崎市のイメージは一般的にそれのみになっていると考えられる。一般的に、ある物事について考える場合、一側面だけ見るのではそれを理解することは不可能である。観光という一面を見ることで、原発のイメージが強い、現在の御前崎市の見方も変わり、理解が深まるのではないだろうか。

御前崎市は平成16(2004)年に浜岡町と御前崎町が合併してできた市であり、前者は浜岡原発のある町、後者は観光事業の盛んな町としてそれぞれ町の内外から認識されていた。最近の出来事であるこの合併は、今回の御前崎観光の研究において、浜岡地区と御前崎地区という2つの地域を比較するという方法を採った大きな理由になっている。また2地域のホスト(観光客を受け入れる側)にそれぞれインタビューすることで、立ち位置の別による合併の影響などの現状認識も比較することが可能となった。このような方法を通して御前崎観光の現状をとりあげることで、「観光の町」と「原発の町」からなる御前崎市を多面的に捉えることができる。これが東日本大震災後の、渦中にある地域での観光調査の成果になると考える。

本稿では次の流れで論を進めていく。まず御前崎市の概要を述べ、浜岡地区と御前崎地区の観光についてそれぞれ歴史と現状を挙げる。この市内2つの地域の比較を交えて御前崎市の観光について現状を把握し、問題点とそれに対する取り組みを述べ、解決策を考察・提案する。御前崎観光の歴史と現状の提示・今後の提案が本稿の目的である。(志田　芙似子)

## 1 浜岡地区の観光の歴史

はじめに、浜岡地区の主な産業の歴史を振り返りたい。戦前までの浜岡地区では、平坦で肥沃な土地が多いことから茶業を中心とした農業が非常に盛んで、次いで漁業が盛んな土地であった。基本的に浜岡地区の人々は農業に携わり、農作物が不作の折に漁業の収入でまかなう「半農半漁」のスタイルをとっていた者が多い。戦後は、高度経済成長による工業発展の影響で、日本全体で若年層、中堅層の男性の農村から都市への人口流出が起こり、農村部の高齢化、女性化の引き金となった。農業に従事する割合が全国に比べて非常に高い純農村地域であった浜岡地区も例外ではなく、昭和25(1950)年から昭和35(1960)年にかけて農業就業人口が大きく減少してしまった。一方、工業の分野では、浜岡地区は交通の面で不便であり、工業用水や資材もこれといってないため、静岡県の他の地域から見ると工業の発展という面

では大幅に立ち遅れている状況が戦後から現在まで続いている。

こうした農業、工業の現状と、高度経済成長にともなう電力需要の増加によって原発の受け入れが具体化し始めた。中部電力は静岡県下に5箇所の原発建設候補地を用意していたが、冷却水を使うための海岸と堅い岩盤があること、住家が少ないこと、土地代が安いことなどが原発を受け入れることのできる土地としての条件を満たしていたことから浜岡町に原発の受け入れを要請した。原発を受け入れてしまうと、温排水などの影響によって近くの海水の状態が変化してしまい、結果として原発付近の漁業は成り立たなくなることが予想された。当然、地元の漁師たちを中心に原発建設の反対運動が数多く行われ、漁民約900人が集まるほど大規模な漁民大会や反対デモが起こったが、中部電力から、安全性の確保、漁業被害補償、沿岸漁業進行を含む地域開発などの条件を提示され、反対運動は終わりを迎えた。そして、浜岡原発は、昭和51(1976)年に、日本で11番目の原発として運転をはじめた。その後も原発増設の受け入れなどを行った結果、中部電力からの地域振興協力費などによってこれまで財政難におちいっていた浜岡町も、県下の町村ではトップの財政規模の地域にまでなった。

一方、浜岡町の新しい産業の1つとしての観光業の歴史が始まったのは、このように原発建設をめぐって浜岡が大きく揺れ動いた昭和30年代のことだった。昭和39(1964)年に公開された『砂の女』[1]という映画のロケが浜岡砂丘(写真1)で行なわれたことがきっかけとなり、浜岡砂丘に全国から観光客がやってくるようになった。浜岡砂丘周辺では20世紀に入るまで、砂の被害が多かったが、大正13(1924)年からの大規模な固定事業と人工斜砂丘と呼ばれる方法を用いることによって飛砂被害を防ぎつつ、砂丘の景観を維持できるようになった。そして、昭和50(1975)年には浜岡砂丘一帯が県立自然公園に指定された。

その後は浜岡砂丘に続いて、遠州七不思議の1つである池宮神社の桜ヶ池(写真2)も浜岡地区の観光スポットとして知られるようになった。池宮神社は歴史ある古社で、創建されたのは西暦584年のことである。「桜明神」とも呼ばれ、比叡山の高僧の皇円阿闍梨の霊を祀っている。この池宮神社の桜ヶ池で年に1回、秋の彼岸に行われる「お櫃納め」[2]という行事には、県外から訪れる人もいる。

---

1 安倍公房原作の長編小説を映画化した作品である。監督は勅使河原宏。

2 褌姿の男が池の中央に赤飯の入ったお櫃を沈める行事のことである。静岡県の無形文化財のひとつ。

写真 1　浜岡砂丘

写真 2　桜ヶ池

池宮神社の他にも浜岡地区には古い歴史を持つ寺社が多く存在する。例えば約1300 年前に文武天皇の命により建てられたという高松神社や、森が 800 年以上も自然のまま保護され、県の天然記念物にもなったことで有名な賀茂神社などがそれにあたる。こうした浜岡地区の観光化に伴い、それまで浜岡地区には無かった観光客用のトイレや駐車場などが新たに整備された。また、昭和 47(1972)年には浜岡原発の隣に浜岡原子力館(写真 3)が開館した。昭和 63(1988)年に増築され、現在の姿となったこの浜岡原子力館では、原子力発電の仕組みや安全性のアピールという目的のほか、施設の周辺にある観光スポットのパンフレットによる紹介、施設入口付近でのお土産の販売など、観光に対する貢献も大きい。さらに浜岡原発の東側、浜岡原子力館の反対側には、静岡県温水利用研究センターという施設がある。この施設では沿岸漁業の振興と栽培漁業の推進を図るために、浜岡原発の温排水を利用して、効率的な養殖事業を行っている。温水利用研究センターは浜岡原発建設によって漁業権の一部を放棄することとなった漁業関係者への補償の 1 つとして昭和 47(1972)年に静岡県漁業協同組合連合会運営のもと、設立された。ここでは主に、マダイやヒラメなどの海産魚介類の種苗の生産を行っている。また、平成 17(2005)年に全国で初めてクエの完全養殖に成功して以来は、年間数万尾規模での養殖が行われている。現在ではクエは「幻の魚」として知られ、御前崎でも観光客にたいへん親しまれている。

写真 3　浜岡原子力館

このように浜岡地区では、他の地域と比べてもともと存在する観光資源が少ないなか、その数少ない観光資源をいかして観光業を進展させてきた。以上が大まかな浜岡地区の観光の歴史である[3]。

[3] 本節の記述は『浜岡町史　通史編』に基づいている。

## 2 御前崎地区の観光の歴史

続いて御前崎地区の観光の歴史について振り返る。御前崎地区は静岡県の南部にあり、同県最南端の岬がある町である。御前崎地区は浜岡地区に比べてもともとの観光資源が豊富に存在する。その観光資源の１つは飛砂によって形成された国指定の天然記念物である風食礫[4]である。この風食礫は御前崎の地理学者である栗林澤一らが昭和 15(1940)年に発見したもので、昭和 18(1943)年に天然記念物となった。2つめには、御前崎海岸が挙げられる。御前崎海岸はアカウミガメの産卵地として有名であり、こちらも昭和 55(1980)年に国の天然記念物に指定された。御前崎海岸がアカウミガメの産卵地となったのは、産卵に適した砂浜と繁殖に適した暗礁があり、さらにアカウミガメが好む黒潮が近くを流れるという環境があることが理由である。また、近くに海があることで夏にはサーフィンや海水浴を目当てに来た観光客などでたいへん賑わう。特に御前崎の海岸は、波の高さや風の強さなどがサーフィンやボディーボードに適しているため、サーフィンの聖地として全国的に知られる観光地の１つである。実際に、世界最大規模のボードセイリングのワールドカップが昭和 59(1984)年に白羽海岸で行われている。

この他にも、御前埼灯台や、猫塚、ねずみ塚などの観光地を持つ。御前埼灯台の歴史は江戸時代にまで遡るほど古く、座礁事故を防ぐために江戸幕府が寛永 12(1635)年に見尾火燈明堂と呼ばれる灯台の前身となるものを建設したのが起源である。その後明治 7(1874)年にイギリスの出身で灯台設計の第一人者とされたリチャード・ヘンリー・ブラントンによって御前埼灯台が完成した。また、日本の灯台史にとって大変重要な灯台であることから、A ランクの保存灯台に指定され、日本の灯台 50 選にも選ばれており、観光地としては昭和 32(1957)年公開の映画、『喜びも悲しみも幾年月』の舞台となったことをきっかけにさらに広く知られるようになった。また、御前埼灯台周辺の海岸では大潮の日には磯遊び場として観光客や地元の人々で賑わう。

一方、猫塚、ねずみ塚は、古くから御前崎地区に伝わる伝説をもとにして作られた墓石である。その伝説は、遍照院という寺の住職が海上を漂流する子猫を助け、寺に連れ帰ったことから始まり、その 10 年後に犬ほどの大きさの大鼠が遍照院を訪れ、住職を食い殺そうとしたところその猫が身を挺して住職を助けた、という内容である。そこでその猫の恩義に報いるために建てられたのが猫塚である。一方ねずみ塚は、大鼠が死んだ後改心し、住職の夢枕に立って海上の安全と大漁を約束したことからこの地の海の守り神として大鼠を祀った、という話に基づいて建てられた。

しかし、このような観光資源に富んだ環境を持ちながら、戦前までの御前崎町では交通網の整備の遅れなどから観光開発の面では遅れており、観光開発の促進に力を入れ始めたのは戦後になってからであった。そのきっかけは昭和 26(1951)年 3 月に静岡県観光協会と静岡新聞社の共催による「静岡県新十景」の１つに御前崎の海

[4] 強い季節風によって海食された円礫が削られてできるもの。三稜石とも呼ばれる。

岸の風景が選出されたことに始まる。昭和 32(1957)年になり御前崎町観光協会を設立すると、観光施設の整備や地元物産の宣伝などを積極的に行うようになり、その後の高度経済成長の所得倍増を背景とした観光ブームによって御前崎地区の観光客の増加が著しくなった。これに加えて、昭和 44(1969)年に東名高速道路が全線開通したこともあり、同地域を訪れる観光客は増加の一途をたどった。この年に行われた静岡県の観光客流動実態調査によると、御前崎町を訪れた観光客は平日で 7800 人と、前年度の約 2 倍の数値を示した。

こうして東名高速道路の開通など陸上の交通面の整備は進んでいった。一方、海上の整備、つまり御前崎における築港が進められたのは東名高速道路の開通以前のことであった。昭和 20(1945)年 11 月に御前崎村振興会、および漁港関係者を委員とする「御前崎築港委員会」を結成したことにはじまり、その後昭和 23(1948)年に静岡県土木部河港課および清水港務所技師によって測量、図面の作成が行われ、工事が着手された。設計当初、御前崎港は避難港[5]として設計されていたが、しだいに物資の陸揚げや漁業における水揚げの必要性が増したことにより、昭和 26(1951)年には地方港湾としての指定を受けることとなった。その後も地元漁船の基地として、あるいは一般貨物取扱港として御前崎港を利用する船舶数は急増した。このことから昭和 43(1968)年から防波堤や岸壁が新設され、昭和 46(1971)年には国際貿易港として開港指定されるまでに成長した。この御前崎港の築港、発展に伴い、御前崎の遠洋漁業も発展し、漁場が拡大していった。御前崎の遠洋漁業は昭和 30 年代以降年々大型化と隻数の増加を示し、自動カツオ釣り機などの高度な技術を用いた機械も開発されるようになった。そのため、天然記念物や観光スポットだけではなく、御前崎地区では海産物が非常に有名である。御前崎港のそばにある平成 9(1997)年 4 月に開館した「海鮮なぶら市場」では、御前崎港に水揚げされる生シラスやカツオなどが販売されている。「なぶら」というのはカツオの群れを意味している。また、この施設の「食遊館」では、寿司やシラスアイス、御前崎地区の郷土料理などが味わえる。御前崎地区の郷土料理として特に有名なものが、「ガワ料理」と呼ばれる料理である。ガワ料理は新鮮なカツオをたたいて氷水に入れ、しょうが、しそ、梅干し、野菜などの具を加えて味噌で溶いた料理である。具をかき混ぜるときに氷が「ガワガワ」と音を立てるためにこのように名付けられた。また、御前崎地区の有名な食べ物は海産物だけではない。例えば、遠州夢咲牛である。遠州夢咲牛とは夢咲管内で生産されている牛肉で、一定の品質基準以上の肉のブランドである。内閣総理大臣賞や農林水産大臣賞を受賞した経歴もあり、全国的にも有名なブランドとして広く知られている。さらに最近では観光客が御前崎地区の食べ物を消費するという形態の観光だけでなく、平成 2(1990)年に誕生した七ツ山砂地観光農園などに見られるような、観光客が農園のさつまいもや落花生などの収穫を体験するという形の観光も行われている。

しかし、昭和 61(1986)年に発表された「地域観光開発計画策定に関する調査報告

---

5 「暴風雨に際し小型船舶が避難のため停泊することを主目的とし、通常貨物の積卸又は旅客の乗降の用に供せられない港湾」と港湾法で定義されている港のこと。

書」では、御前崎の観光は「夏季集中の通過型観光」が特徴であるとされている。通過型観光というのは、観光客数の割に宿泊者の数が少ないという性質を持った観光のことであり、こうした地域では観光客の購買、消費が少なく、地域経済の活性化につながらないという問題点を持つ。そこで、通過型の観光から滞在型の観光に変えようとする動きが御前崎地区全体で見られたものの、平成 13(2001)年に御前崎観光ホテルが倒産し、また、平成 15(2003)年には県内で 8 番目の公営国民宿舎であった国民宿舎おまえざき荘が閉館した。さらに御前崎町と浜岡町の合併で御前崎市が誕生した平成 16(2004)年には御前崎サンホテルが建物の老朽化で営業を停止するなど、相次いで御前崎地区の宿泊施設が閉鎖された。そして、現在残っている大きな観光ホテルは御前崎グランドホテルのみである。このような現状であるため、御前崎地区は浜岡地区に比べて観光客で賑わう一方で、未だ通過型観光地としての位置づけをなされたままでいるといえる[6]。(畝重　将矢)

### 3 御前崎市の観光をめぐる課題

現在、御前崎市全体の観光客数と宿泊客数は減少している。また、御前崎地区と浜岡地区では観光に対する温度差もあり、観光施設や宿泊施設の形態も異なる。御前崎地区の方が観光に比較的力を入れており、観光客数、宿泊客数ともに多いというのが現状である。原因は多様であり、問題点は多くある。この章では御前崎市の観光の課題を浜岡地区、御前崎地区の２つの地域の比較を交え、見出していく。また、御前崎市を論ずるのに欠かせない原発に関する地域の反応、状況も考察する。そして御前崎市に限らずどの地域にも関連するであろう観光業そのものが抱えている問題点も考察する。

### 3.1 浜岡地区の観光をめぐる課題

上記の通り、浜岡地区では御前崎地区と比べ観光業にあまり力を入れていない。また、観光資源の量や質、宿泊施設の形態も御前崎地区とは大いに異なる。浜岡地区の主な観光資源は浜岡原発の敷地内にある原子力館、桜ヶ池、浜岡砂丘があげられる。平成 23(2011)年 3 月 11 日の東日本大震災及び福島第一原子力発電所事故の影響もあってか原子力館の客数は増加している。桜ヶ池では夏にはお祭り、秋にはお櫃収めという行事がある。夏のお祭りは桜ヶ池のある佐倉地区の小さなお祭りであるが、お櫃収めは静岡県指定無形民俗文化財に指定されており、他市や他県からも来客する人もいる。中には毎年参拝する人もおり、リピーターを確保していると言える。また、ローカルテレビでは毎年取り上げられており、時々NHK も取材にくるという。しかし、経済効果は小さく、PR も少ない。また、駐車場など桜ヶ池周辺を整備する計画もあったが、年に 1 回の行事のために整備する必要はないということや地域の声などによって実現に至らなかった。そして浜岡砂丘も昔は砂丘も高く、まさに自然が生んだ観光資源ということで観光客が来ていたが、現在は砂丘の規模は小さくなり、標高も低くなり、来客数は減少している。またあたり一面が遊

6 本節の記述は『御前崎町史　通史編』に基づいている。

泳禁止になり地元の人も来る頻度は低いそうだ。

全体として、平成 16(2004)年の浜岡地区と御前崎地区の合併以前から浜岡地区は観光に対して力を入れていないようであった。というのも旧浜岡町の商工会が観光を担っており、花火大会などを行っていたが身内同士の行事にすぎなかったためである。この名残か現在も御前崎市役所の観光商工課と浜岡地区の商工会とはうまく連携がとれておらず、課題でもあるそうだ。そして市でも現在、浜岡地区において新たなイベントや観光関連のインフラの整備をするといったことは財政、人的資源の問題から計画していない。

宿泊施設の形態が御前崎地区と異なると述べたが、浜岡地区では原発の職員や工事関係者をターゲットにした民宿や宿泊施設が多い。原発関係者と一般の旅行客との生活リズムは異なるため、どの民宿でも観光客は基本的に受け入れておらず、原発ありきでなりたっている。しかし、工事が終了したり、廃炉になれば、仕事がなくなり民宿から原発関係者が出ていくという事態もありうるかもしれない。

### 3.2 御前崎地区の観光をめぐる課題

次に御前崎地区の観光について述べていく。前述したとおり御前崎地区では観光がさかんで市でも力を入れている。主な観光資源としては海水浴場、サーフィン、なぶら市場という海鮮市場、灯台など海を利用した観光を行っており、ブルーツーリズム[7]を活かしていると言える。海水浴場は日本の海水浴場百景に選ばれており、御前崎灯台も日本の灯台 50 選に選ばれている。このように景勝地や文化財的な施設もいくつかある。しかし、前述したとおり、御前崎市全体の観光客、宿泊数は減少しており、御前崎地区だけを見ても観光客、宿泊数は減少しているのが現状である。御前崎の海水浴場はサーフィンの聖地として有名で、波や風がサーファーにとって非常に適しているという。サーフィンのために他地域から移住する人もいるくらいだ。また駐車場が市全体で無料というのも魅力であり、サーファー達にも助かっている。しかしその反面、市の収入はなく、かわりに何か対策を講じているわけではない。そこで駐車場やその周辺に店を出したり、設備を充実させたいという意見があるが、ここでも財政、人的資源の問題、市の制約により実行できないでいる。夏に海辺にウミガメがやってきて産卵するというのも御前崎地区の観光資源の１つであり、毎年楽しみにしている人も多い。そこで地域の人々がボランティア活動として海辺をきれいにしたりしているが、これも観光振興という面からは現状維持にとどまっている。浜岡地区と同様、御前崎地区でも新しいイベントやインフラ整備を行うという計画はない。また、観光協会としては交通の便を改善したいという。御前崎市には現在鉄道が通っていない。最も近い駅が菊川駅、そこからバスや車などを利用するしかないというのも観光客減少に関係していると言える。最近では新東名高速道路が完成したが、最も近いサービスエリアも御前崎市からは遠い距離にあるため、期待はできない。

---

[7] 海の沿岸や島などに滞在し、海辺ならではの生活体験を通じて心と体をリフレッシュさせる余暇活動のこと

前述したとおり、御前崎地区の宿泊施設の形態は浜岡地区とは異なる。浜岡地区では原発関係者向けであるのに対し、御前崎地区では観光客向けの宿泊施設が多い。しかし、先にも述べたように現在では大きな観光客向けのホテルは御前崎グランドホテル１つのみである。

### 3.3 原発の影響

御前崎市を語る上で欠かせないのが原発であるが、浜岡地区、御前崎地区どちらも原発に依存しており、その恩恵をうけていると言える。「原発があって当たり前」「原発があってこそ生活がなりたっている」というのが地域の声である。浜岡地区では民宿をはじめに恩恵を受けている。また、原発事故の影響に関して地元の人々の生活や心情に大きな変化はなく、地域の人々は気にしていないようであった。

他方、御前崎地区では風評被害が著しい。グランドホテルには「本当に原発は停止しているのか」「本当に安全なのか」という問い合わせが多く来ている。情報大国である日本であるが逆に情報源が多いために間違った情報や噂、イメージが錯綜している。課題としては御前崎市がいかに安全かを説明に、観光客に安心してもらうことである。

全体としてはやはり問題点や課題が多くみえる。財政、人的資源、市の制約といった問題で取り組むことができない。観光客、宿泊客の減少または現状維持というのが今の状況である。新たな開発やイベント、整備がないのであれば、今ある資源の再利用・再発掘ということが要求される。しかし観光業に携わる人や地域の声を聞くと問題はそれだけではない。現代の若者の自然離れや遊びの形態が変化してきたということである。御前崎市の交通の便は悪いといえど今やどこへでも行ける時代。安く早く海外やディズニーランドといった大型観光名所やイベントに行くことができるようになったのだ。また、休日は家や屋内での娯楽も増えているため自然離れが進んでいる。御前崎市も同様、海離れが進んでいると言える。富士山や琵琶湖といった大型観光スポットは今でも人は多いが、御前崎市にはそういった天然の観光資源がそもそも少ないということも観光客数や宿泊客数の減少につながっているのかもしれない。

## 4 課題への取り組み

前章では御前崎市の観光をめぐる課題を述べた。続くこの章ではそれらに対して行われている現在の取り組みについて論じる。前章では新しいイベントや観光関連のインフラ整備は計画されていないと述べたが、以前から続けられている取り組みや対策は存在している。また、前章で今ある資源の再利用・再発掘の必要性を述べたが、近年そのような行事や取り組みが行われている。

### 4.1 浜岡地区での取り組み

何度も述べているが、浜岡地区では観光に力を入れていない。それに対し、御前

崎地区では観光が盛んなことから、御前崎地区の観光スポットや観光行事を PR するという取り組みが頻繁に見られた。原子力館では入口付近の壁に御前崎市の観光スポットを紹介した大きな地図や、それら観光スポットや観光行事のパンフレットを置いていた。原子力館の受付の方に聞いたところ多くの人がパンフレットを持ち帰り、時間がたてばなくなるそうだ。また、原子力館としてはケーブルテレビや新聞の折り込みを利用し積極的に PR していると言える。浜岡砂丘では観光客が減少傾向にあるが、近年、砂丘近くの白砂公園に河津桜を植えたところ満開になり、訪れる人が増えたという。これは昔からあった砂丘や公園の再利用、つまり今ある資源を再利用していると言えるのではないか。そして浜岡地区では観光農園という施設がある。われわれは七ツ山砂地観光農園にインタビューしたのだが、ここでは区画整理され農業をできなくなった人や収穫労力として消費者に農業体験してもらっている。客層は子供から年配の方まで幅広く、客数は横ばい、もしくは増加中である。ここでもテレビ静岡や『ジャフメイト[8]』などを利用し PR を行っている。観光協会や市とはうまく連携が取れており、市からの補助金を有効に利用している。浜岡の砂地を利用した農業を営んでおり、他地域とはことなる農業も魅力の 1 つではないか。またこれらは観光振興と意識せずとも取り組んでいる。また、この砂地を利用した観光も今ある資源を再利用していると言える。また、農業と観光が連携したグリーンツーリズムを活かしているのだ。七ツ山観光農園ではクイックスイートという甘い品種のサツマイモが収穫され、子供や女性に人気である。しかし、観光農園の収穫時期と他の観光スポットや行事の時期がかみあわないため連携がとれていない。他地域からも観光客が来るが、土日など日帰りが多いため宿泊施設との連携もない。他にも、最近では平成 22(2010)年から御前崎みなとかつお祭りという産業際が秋に浜岡地区で行われている。

### 4.2 御前崎地区での取り組み

浜岡地区と比べて観光において盛んな御前崎地区であるが、観光客数、宿泊客数の減少と悩んでいる。しかし御前崎市の観光と言えば御前崎地区であるため、取り組みとしては多岐にわたる。他市や他県とも交流があり、市役所の商工観光課では長野県の高森町と交流があり、なぶら市場にはポスターが貼られており PR している。また高森町でも御前崎についての PR がなされている。市役所は他にも東京都、神奈川県、愛知県、北海道にも PR しに行っている。この PR は静岡県西部観光協会として参加するのだが、御前崎市単独でも大阪府のモーターショーで PR した。ここで重要なのは来てもらうことよりもまず御前崎市について知ってもらいたいということである。他にも、山梨県の甲斐市、中央市、昭和町と保養所契約を結んでいる。これはこの 3 市から補助金が支給され、御前崎市の観光スポットに来てもらうというものである。施設によっては無料券やサービスを行っている。現在は市でもこの保養所契約に力を入れており、広告やテレビ、ラジオでも積極的に PR している。また、これからもより一層力をいれるそうだ。そこで多くの保養客はグラン

[8] (社)日本自動車連盟(JAF) の月刊誌

ドホテルに宿泊するのだが、グランドホテルでも工夫がなされている。特に客が多く来る夏に海水浴やサーフィン、ウミガメの産卵に対して準備やサービスがなされており、リピーターを確保している。例えば、宿泊客にウミガメの産卵について案内したりしている。また、幻の魚クエを使った料理店や遠州夢咲牛を扱う JA、サツマイモを使った焼酎・干しいもの業者と連携し料理を提携している。グランドホテルは夏が最も客数が多いが、夏以外でも客は来る。特に年配の方はゆっくりしていきたいということで夏以外のシーズンに来客する方が多い。なかでも山梨県や長野県など周りに海のない地域からバスツアーなどで平日でも客が見える。さらには韓国、中国、台湾など海外からも来る。こういったインバウンド[9]は年間を通して一定の水準を保っているということで宿泊客をしっかりと確保していると言える。最近完成された新東名高速道路のサービスエリアで PR 活動を行う予定であるが、あまり効果は期待できない。理由としては前述したとおり御前崎市からは遠いためである。

御前崎市都市計画マスタープランというものがある。簡単に説明すると平成 20(2008)年から 2028 年までにかけて、市の現状を見極め、分野別に方針をだし、地域ごとに構想の目的と考え方を計画するものである。観光関連についてはインフラ整備、観光施設など観光資源の利用の促進と適正な管理、環境保全と環境形成、御前崎市と近接した富士山静岡空港の有効利用である。整備は具体的には灯台、なぶら市場など御前崎地区を中心としたものであるが、観光農園とも連携をはかり通過型の観光から滞在型の観光を目指す。そうなれば浜岡地区の宿泊施設の形態も変わる必要性が生まれるかもしれない。また、他地域では見られない御前崎市特有の大自然の景観、新鮮な食材をより利用する。また富士山静岡空港から近く集客が望めることから有効活用を図る。市のホームページでは空港から観光スポットまでの行き方や距離を紹介している。また、地域の宿泊組合や民間企業と連携をはかり、観光振興につなげる。さらに、体験型観光施設の導入や民間観光商業施設の誘致をはかる。こういった計画はあるが、やはり市役所や観光協会によると、前述したとおり今のところ新たなイベントや整備は実施しない予定である。しかし、大自然の景観や新鮮な食材を利用というのは資源の再利用ということにつながるのではないか。また、浜岡地区ではグリーンツーリズム、御前崎地区ではブルーツーリズムをより一層活かすことが求められる。１つの市でこの２つを併せ持つことは珍しいため、これを有効活用すべきである。（佐伯　英朗）

## おわりに

これまで御前崎市の観光の歴史、現状、課題について述べてきた。3 節でみたように、主な課題として、御前崎地区と浜岡地区間の観光に対する温度差や観光インフラ整備の困難性、浜岡原発による風評被害、などが挙げられる。

御前崎市は豊富な農産資源・海産資源を擁する街である。その山・海の両方の資源を活かすことが、観光業を発展させる近道である。今日ではファストフードなど

9 外国人旅行者を自国へ誘致することの意

の効率万能、規格量産化に疑問を覚える人が増え、また生物の営みとのふれあいが希薄となり、自然と人間のかかわりが縁遠くなってしまった。そこで都市部に住む人々が日々の生活から抜け出し、スローフードやスローライフなど、農村や海辺の地域でゆっくりと休暇を楽しむ。自然を用いた体験参加型の余暇活動、つまりはグリーンツーリズムやブルーツーリズムといったものに関心が寄せられているのである。最近はその両方を導入しようとしている自治体が少数ながらも存在する。そのうちの一つ、富山県魚津市観光協会の活動の一部について紹介する。

魚津市は富山県の東部に位置する自治体であり、その名前のとおり海産資源[10]が豊富な街である。有名な観光資源には、蜃気楼とほたるいか、埋没林などがある。また、市からごく近くに位置する毛勝山から流れる水は、海で蒸発して雨雲などにより山へ戻る「水循環」というサイクルを経てとても清浄になる。その豊かな水と豊富な自然により農産物[11]は高品質で美味しく育つといわれている。この自然環境を観光資源として有効活用しようとしているのである。具体的には、農山漁村での体験型観光事業の創出や、水循環などあまり知られていない資源の発掘、向上といったことが取り組まれている。

以上の例で重要なのは、元々存在していた資源を地域の人々が再発見し、観光資源として昇華させ、魅力を強化することである。そこでどのような特色をもって資源とするのかが問題となる。ターゲットは都市部の人々であるため、言うまでもなく都会にはないものが好まれる。つまり農園や漁村、広大な自然といった、日常的なものがセールスポイントとなる可能性を秘めている。例えば前節で挙げた観光農園の事例では、農作物の育成を生産者が、収穫を観光客が担うことで、生産者の労力削減と消費者の非日常体験というお互いのメリットが生まれているのである。さらに浜岡砂丘に河津桜を植えたことで、人的資源や予算をそれほど投入せずに、観光資源の魅力向上に成功している。浜岡地区は観光にあまり力を注いでいないようだが、それは住民が今ある観光資源に諦めを感じているからではないだろうか。今一度地元になにがあるかを見つめ直し、魅力づけを行えば観光面で発展できる可能性は十分にある。

また、これまでの旅行形態は、都市部の旅行会社で企画される「発地型」観光がほとんどであった。それに対し、近年では地元の旅行業者がより詳しい情報から企画する「着地型」観光[12]が注目されるようになっている。着地型旅行が支持される理由として、次の2つの背景が挙げられる。1つ目の背景は、旅行者のニーズが細分化していることである。観光客は団体よりも個人で訪れることが多くなり、その上地元の人しか知らない穴場を楽しむ、といったように旅行の目的がより深く、明確になっているのである。もう1つの背景は、地元振興との結びつきが期待できることである。具体的に言えば、従来の発地型観光の格安パックなどは地元の利益が少ないが、一方着地型観光の場合、地元の旅行業者や関連業者が利益を確保できる

10 主な海産物として、ホタルイカ、ブリ、ベニズワイガニ、白エビ、カワハギがある。
11 主な農産物として、りんご、なし、ぶどう、コシヒカリがある。
12 観光庁が社団法人日本観光振興協会と連携して推進している。

のだ。

このことから、多くのスポットを巡れるような、つまり旅行客のニーズに合ったツアープランを地元の業者が提供することが重要であるとわかる。それには直売場や観光施設・資源の経営者たちの協力が欠かせない。数々の場所で利益が上がる仕組みを考慮する必要がある。また、交通や駐車場面で資金・人員の限界があるため、数多くの日帰り観光客に来てもらうよりは、むしろ少数でもかまわないので長く宿泊してもらえる観光客に焦点を当てたほうがよいだろう。たとえば長期滞在客へ宿泊費を割引する仕組みを作ることや、宿泊期間内のタクシー利用額を定額、もしくは割引にするなどである。また、最近では牧之原市に富士山静岡空港が開港した。これにより遠い地方の旅行客でも御前崎を訪れる機会が生まれたのである。そして空港を利用して訪れる旅行客は、どこを観光するか、どこに泊まるかなど、明確な旅行プランを構想している場合が多いと予想される。つまり、彼らは通過型よりも滞在型の観光を目的にしており、そのような観光客を今後どのようにして御前崎市に呼び込むかが課題となる。

御前崎地区のグランドホテルに勤務する西村英二さん(44)によれば、ホテルのオーナーは原発反対派であるとすでにメディアに公言しているそうだ。周囲では原発の話題がある意味タブーとなっているなか、あえてオーナーは反対の立場をしっかり示した。現在浜岡原発が停止していることで、東北大震災のころよりも風評被害は治まっているようだ。しかしそれは原発が再稼動すれば、宿泊客の数が減る可能性もあるということだ。一方浜岡地区で民宿を営む人々は、中電の業者やその関連業者が主な宿泊客であるため、浜岡原発が廃炉になる可能性を視野に入れると、以前と同じ水準の収入を保つことはきわめて難しい。そういった状況から、浜岡地区の観光業者は原発に多少の不安を持ち合わせていながらも、原発を否定することはできないようだ。御前崎地区と浜岡地区の観光に対する温度差は、原発との関係が基になっているのではないだろうか。

しかし原発に関心が集まっている今、この状況は市の観光業にとってある意味チャンスであるかもしれない。浜岡原発の近くにある原子力館では、大震災後の入場者がかなり増えたようだ。理由はともかく、御前崎市が世間の関心の的となったのだ。この好機に乗り、浜岡原発だけでなく、御前崎市の観光についても知ってもらうことが重要である。前節で述べたように、原子力館には御前崎市の観光パンフレットが置いてあるのだが、それらは時間が経つとすぐになくなってしまうそうだ。このことから、いかに浜岡原発の宣伝効果が強いかがわかる。まずは市外・県外の人々の御前崎市に対する認知度を高め、旅行客の興味を引くのである。これと同時に、御前崎地区と浜岡地区の人々は、お互いの地区の観光資源PRも重要視するべきである。先ほど述べたように長期滞在客に焦点を当てるのであれば、その観光客はより多くの観光スポットを訪れることが予想される。そうした時に、「区」という単位よりも「市」という単位で魅力を伝えたほうが、観光客にとって選択の幅が広がる。浜岡地区と御前崎地区間で相互のPRを行い、その結果として両者の観光における相乗効果を目指すということである。

その相乗効果を担う相手は市内に限ったことではない。保養所契約を結んでいる山梨や友好都市提携の盟約[13]を結んでいる長野県の高森町など、前節で述べたような交流の深い自治体に御前崎市のPRを依頼するというのも有効な手段である。都市同士でお互いのPRを行うことは、離れた土地でも継続的に宣伝活動ができるという点で非常に合理的である。御前崎市観光協会会長である小野木邦治さん(47)は、今まで国内で広く浅くPRをしていたが、これからは山梨で重点的にPRをしたいと言っていた。まだ保養所のこと自体を知らない人が多いようで、もっとPRしたい、保養所契約のことを知ったら御前崎に来るはずだと述べていた。このようにPRする対象地域を重点的に絞ることが必要になってくる。

今回御前崎地区と浜岡地区との比較を交えてこの御前崎市の観光を見てきたが、やはりこの街には浜岡原発の影響力が根強く存在している。東北大震災を契機に、賛否両論を含め住民らの原発に対する意識は強くなる一方である。住民の暮らしや産業という面のみならず、観光という面でもその変化を無視することはできない。そのような状況下で、地元の人々には以前の体制を守ることよりも、新しい変化に対し積極的に順応することが求められる。浜岡では原発が産業の中心となっているが、現在浜岡原発が停止している以上、別の形でも街を発展させていかなければならない。その一翼を担う可能性が御前崎の観光にはあるのだ。(森下　奨士)

**参考文献・資料・HP**

御前崎市・編
2011『浜岡町史 通史編』
御前崎町・編
1996『御前崎町史 通史編』
スミス,V.・編　三村浩史・訳
1991『観光・リゾート開発の人類学—ホスト&ゲスト論でみる地域文化の対応』勁草書房
橋本和也
1999『観光人類学の戦略—文化の売り方・売られ方』世界思想社
山下晋司・編
2007『観光文化学』新曜社

魚津市観光協会公式サイト 魚津たびナビ
http://www.uozu-kanko.jp/ (2012.10.16閲覧)
御前崎市ホームページ
http://www.city.omaezaki.shizuoka.jp/ (2012.10.16閲覧)

[13] 平成19(2007)年9月24日に結ばれた。高森町と交流を始めたのは、昭和61(1986)年4月6日に旧御前崎町で開催された第1回「産業観光まつり」以降である。

長野県高森町ホームページ
http://www.town.takamori.nagano.jp/ (2012/10/16 閲覧)